

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

## ボヤキの年になりそうだが頑張ろう

読者の皆さんに電話してみた。

「肥料の調達がままならない。2022年春の分は確保しているが、肥料屋の話ではその年の4月以降の出荷分については保証できないみたい」と不安を語る人が多い。多くの本誌読者の場合、2022年度分は調達済みだが、その先は予想が立たない。特に府県では「ほとんどの農家はまだそんな状況すら認識していないのではないか」と皆が話す。世界に広がる自国第一主義、原油高、円安、海上運賃の高騰、中国やロシアの動き、COP26に合わせた各国のCO<sub>2</sub>削減の動きにつれたエネルギー政策の変化もこれに拍車をかける。輸入穀物の高騰など合わせて、肥料調達不安は今後も続くのは間違いない。いよいよ汚泥肥料の調達を真剣に考えたほうがよさそうだ。

さらに皆のボヤキは「水田リノベーション事業」に及ぶ。「水稲と転換作物とのブロックローテーション体系を構築するため、過去5年間に一度も水張りが行なわれていない農地は交付対象水田から除外する」というニュース。水田をすべて転作して麦や大豆を作り続けている優れた水田地帯の畑作農家もいる。彼こそ農業政策に協力してコメ余りを防ぐために努力してきた人ではないのか？ 様々にひねくり出されてきた水田政策。その都度辻褃合わせを繰り返してきたために、意味がわからなくなる。「どうせまた次が出てくるよ」と農家は猫の目を伺うようになる。そもそもなぜブロックローテーションにこだわるのだろう。交付金の財源に不安があるのなら、ただ単に飼料用米に対する法外な交付金を大幅に減額するのが一番良い方法だと思うのだが。

そんな電話をする中で、まったく別の、しかし現在であれば深刻な話を聞いた。彼は、借りた排水の悪い水田に何年もかけて暗渠を入れ、合筆して1ha区画の水田を作った。ところが、その圃場を見ず知らずの人が欲しがっているのだという話を伝えている。その土地の地主は、二世代前から町に暮らす人。相続のことも知らされなかったために、年貢米をどこに届けたものか探し回ったという

いわくつきの水田。それが寝耳に水の購入希望者の登場。購入希望者が農業をしようとしているのかどうかもわからないが、背景には農地の相続を受けたくない地主の家庭事情もあるようだ。地主から彼に農地を買ってほしいと言ってくるなら、借金をしてでも買わないわけではないが、年貢米の送り先をやっと探し出したという相手。彼が借地を始めたお爺さんの代には顔見知りであっても、今や見ず知らずの相手といってもよい。耕作放棄地になりそうな排水の悪い農地を彼の努力で良田に変えたのだ。耕作放棄地が生じるのは、単に作りづらい場所だからというだけでなく、現代の不在地主の存在、それも相続が絡む時に顕在化する。農地を単なる不動産としてしか見ない農家の末裔たちの思惑が彼の顔を曇らせる。「良くなったら返せと言われるのがおちだから、手間をかけるのは馬鹿だ」と言われた時代から父親とともにそんな苦勞を続けてきた。どこにでもあるものなのだろうか。きっと彼は、この土地のためにまた借金をすることになるだろう。それでよいのだ。